

教養総合 I 「高校生による SDGs プロジェクト」 研究旅行報告

北 島 咲 江 (国語科)

元 山 敬 太 (理 科)

「SDGs」「サステナビリティ」「アントレプレナーシップ」「まちづくり」「徳島県上勝町」

はじめに

2020 年度に開講した教養総合 I 「高校生による SDGs プロジェクト」は、高校 2 年生を対象とした授業である。生徒は、自身の興味関心にもとづいた社会課題を発見し、その解決を目指して企業や大学等と連携し協働する過程で、学校の外に学びの場・活躍の場を生み出すことで、ソーシャルアントレプレナーシップを育てている。この授業は、理科の教員と国語科の教員がタッグを組んで行う教科横断型の PBL であり、両教員はどちらも前職（元山の前職はホテルのパティシエ、北島の前職は広告代理店のプランナー）を持っており、学校外で学び、活躍できることの重要性を実感している。開講後の 2 年間はコロナ禍だったが、企業とのオンラインミーティング、企業人や大学教授による講演会、研究旅行先だったメルボルン Monash 大学の教授陣と学生へのプレゼンテーション大会なども実施した。当授業の目標には、SDGs の視点で社会・世界を見て、社会課題を発見し、解決策を探究し続ける力の育成と、失敗を糧にできるレジリエンスの養成を据えている。

当初、オーストラリア第 2 の都市であるメルボルンでの研究旅行を予定していたが、コロナ禍のため昨年度同様に今年度も実施できなかった。そこで、急遽研究旅行先を SDGs 未来都市である徳島県上勝町に変更し、感染者数が下火になっていた 2021 年 12 月 10 日～13 日(3泊4日)の期間に研究旅行を実施した。コロナ禍での任意参加のため、参加生徒数は 27 名となった。

徳島県上勝町は、人口約 1,400 人の小さな町である。徳島市内から車で約 1 時間の地にあり、面積の 9 割近くが山林で、急な斜面には棚田や段々畑が並ぶ。現在、町の高齢化率は 53% であり⁽¹⁾、過疎化と高齢化が進んでいる。この町が、2003 年に自治体として日本で初めての「ゼロ・ウェイスト (Zero = 0, Waste = 廃棄物) 宣言」を行ったことは有名である。また、「葉っぱビジネス」で有名な (株) いろどりの事業とまちづくり・町おこしの過程は、2012 年に吉行和子、富司純子、中尾ミエをキャストに『人生いろどり』

として映画化もされた。2021年10月には、講談社の雑誌『FRaU』で「サステナブルを学ぶ、徳島の旅」と題した特集が生まれ、上勝町が特集された。メディアに取りあげられることの多いこの町には、1年間に町の人口の倍近い数の視察者が訪れる。官公庁をはじめ、コロナ禍前は海外からの視察も多かったという。

国内外で話題になり人々をひきつける上勝町は、机上の学びではいま一つ捉えがたいSDGsを体感するにはうってつけの町であると考え、研究旅行を企画した。研究旅行の目標には、以下3つを挙げた。①SDGs未来都市である徳島県上勝町の町のあり方を知る、②ソーシャルビジネスのあり方とまちづくり、人々の意識について知る、③45種類のゴミ分別体験からゴミと町の持続性について考える。以下、徳島県上勝町での研究旅行について報告する。

1、ホテル WHY で考える SDGs (1 日目)

1日目は、徳島阿波おどり空港に到着後、徳島駅前へ移動し、各自自由に昼食を選択して食べた。徳島ラーメン、阿波尾鶏等、徳島の味に初めて触れる生徒が多かった。皆が違うものを食べることで、徳島の食に



〔写真1-1〕 藍染め体験

について情報共有できた。昼食後は、藍染め体験をするために、藍染工芸館を訪れた(写真1-1,1-2)。徳島では古くから藍が生産され、江戸期には阿波藍の生産量が増大し、藩の財政を支えていたことを学んだ。中腰での作業の大変さを体感した後、上勝町に向かった。



〔写真1-2〕 中腰での作業を体験する。

上勝町に到着後、ゼロ・ウェイストセンターに向かい、ホテル WHY と上勝町唯一のゴミステーションを見学した。ホテル WHY は、福岡県の観光列車や上越アート新幹線など、各地域の魅力を引き出すプロデュースで定評のある(株)トランジットジェネラルオフィスが手掛けた環境型複合施設だ。ゼロ・ウェイストセンターで働く大塚桃菜さんからは、上勝町におけるゴミ分別に関するご講演を頂いた(写真2)。大塚さんによると、1970年代から1990年代後半まで、町のゴミは野焼きされたり埋められたりと、町はゴミで溢れていたという。そんな上勝町は、2003年に日本の自治体として初のゼロ・ウェイスト宣言を行い、さらに2020年に二度目のゼロ・ウェイスト宣言を行った。現在、上勝町のゴミ捨て場は、ホテル WHY に隣接しているゴミステーションただ1つである。一番の驚きは、ゴミ



〔写真2〕 大塚桃菜さんの講演を聴く。24歳の大塚さんからのメッセージが高校生に響く。

ステーションにゴミ捨て場特有の臭いが全くないことだ。臭いが出ない主な理由は、2つある。①生ごみを回収しない（各家庭のコンポスト購入費を町が補助することにより、各家庭で生ごみは肥料化されている）、②ゴミの洗浄・乾燥を、ゴミを出す住民が徹底して行っている。臭いが出ないからこそ上勝町のゴミステーションはホテル WHY に隣接できるのだ。宿泊者によるゴミの45分別体験（写真3-1）や客室で自分が使用する石鹸の切り分け体験（写真3-2）、自身が飲む量のサービス茶葉やコーヒー豆を予め申告する等のゼロ・ウェイストアクション体験が、このホテルの魅力となっている。



〔写真3-1〕 ゴミが45分別されている様子を見学する。宿泊日は、チェックアウト前に自身が出したゴミを45分別する。



〔写真3-2〕 宿泊者は自分の使う分だけ石鹸を切る。茶葉やコーヒー粉は自分が飲む量を予め申告する。

上勝町の住民は自宅で出るゴミをゼロ・ウェイストセンターに持参し、45分別している。この45分別された資源を、ゼロ・ウェイストセンター内ではさらに65分別して、リサイクル資源として全国各地へ販売している。現在リサイクル率は80%に上り、町内のゴミ資源を販売することで得た収入は、住民のために利用されるという好循環のシステムがある。また、ルール通りに分別することで住民には「ちりつもポイント」が付与され、貯まったポイントは、日用品や商品券に交換できる仕組みもある。

上勝町の住民は自宅で出るゴミをゼロ・ウェイストセンターに持参し、45分別している。この45分別された資源を、ゼロ・ウェイストセンター内ではさらに65分別して、リサイクル資源として全国各地へ販売している。現在リサイクル率は80%に上り、町内のゴミ資源を販売することで得た収入は、住民のために利用されるという好循環のシステムがある。また、ルール通りに分別することで住民には「ちりつもポイント」が付与され、貯まったポイントは、日用品や商品券に交換できる仕組みもある。

ゴミ捨て場には、汚れているゴミ資源は汚れないゴミ資源よりもリサイクル費用がかかることを示す掲示があり（写真4-1,4-2）、洗浄済みかつ乾燥した状態のゴミを持ち込むことが大切だとわかる。ゴミ資源を全国の回収業者に送る回数は年2回なので⁽²⁾、資源としてリサイクルされるゴミは、長期間外で保管されてもカビが生えたり、虫が湧いたり、悪臭がしたりすることのないように、捨てる際によく洗って乾燥させなければならないのだ。



〔写真4-1〕 きれいに洗ってあるプラスチックゴミは、汚れているプラスチックゴミよりリサイクル費用がかかることがわかる。全てのゴミ回収ボックスにリサイクル値が掲示されている。



〔写真4-2〕 どうしても洗やさんければならないものを捨てる場所。現状、ゴミの2割が分別できない。

大塚さんの話では、これだけの分別を行っても未だ20%のゴミはリサイクルできず、焼却され埋め立てられている。20%がリサイクルできない主な理由として、「作る段階で再生するデザインになっていない」点を大塚さんは挙げた。代表例は、スニーカーだ。複数の素材がミックスされているものは再生しにくく、特

に塩化ビニールの再生が難しいと言う。消費者視点のリサイクルには限界があること、生産者側が作る段階で、リサイクルを意識すべきことをここで学んだ。

ゴミ捨て場の隣には、町内の小学生のアイデアによって作られた「くるくるショップ」があり（写真5）、住民は自宅で不要になったものを持ち込み、必要なものを無料で持ち帰ることができる。学校の



〔写真5〕町内の小学生が発案した「くるくるショップ」

〔写真6〕シャンプー等のパウチパックをリサイクルした子供用のブロック。



体操着や制服は、このショップ内で、無駄なく各家庭から家庭へと「くるくる」リサイクルされているのだ。さらに、住民が集う場でもあるゼロ・ウェイストセンターには、子供用のブロックも置いてある（写真6）。これは、シャンプーのパウチパックをリサイクルして作られたブロックだ。匂いを嗅ぐと、シャンプーの匂いがすることに、生徒は驚いていた。

大塚さんのご講演とホテル WHY 見学の後には、特別企画としてオンラインで徳島大学大学院社会産業理工学研究部社会総合科学域の准教授である佐原先生とつながり、佐



〔写真7〕徳島大学大学院佐原先生とオンラインで繋がる。

原先生が取り組んでいる「成層圏阿波晩茶」について30分の講義を頂いた（写真7）。阿波晩茶は、日本に4つしかない後発酵茶の内の1つである。佐原先生は、徳島県名産の阿波晩茶を成層圏に飛ばし、その旨味成分の変化を研究した結果、成層圏に飛ばされた阿波晩茶の旨味は通常の4倍になることがわ

かったという。伝統的な阿波晩茶を地方創生のためのプロダクトの一つとして開発する取り組みが大学で行われていることに生徒は興味を持ったようだ。成層圏阿波晩茶は市販されていないが、一部の生徒は3日目に試飲するチャンスに恵まれた。

ホテル WHY は4部屋しかない小さなホテルなので、生徒全員が一度に泊まることはできなかった。そこで、生徒は3泊のうち1泊はホテル WHY に宿泊し、町とホテルとゴミステーションが一体となって循環型の町を生み出していることを体感できるようにした。残りの2泊は、ホテル WHY から車で5分の地にある月ヶ谷温泉・月の宿に宿泊した。両施設ともに、県外の高校が行う研究旅行の宿泊を受け入れるのは初めてとのことで、様々にご協力を頂いた。

ホテル WHY の夜には、双眼鏡で星空観察を行った。真っ



〔写真8〕大自然の夜。ランブを中央に集めてダンスの交流が始まった。

暗な芝生を歩いていくと、上空には満天の星空が広がっており、あちこちから歓声があがった。流れ星が飛び交い、星がくっきりと見える空の中に、生徒は星座を探し始めた。いつの間にか生徒は全員芝生に寝転がったり、手を取り合って踊ったり、部屋から持ち出したわずかなランプの光の中で友人の輪がどんどん広がっていった（写真8 前ページ）。12月の寒空の中だったが、気づけば2時間が過ぎていた。星空の下の思い出深い時間となった。

2、とくしま動物園、日和佐ウミガメ博物館カレッタで考える SDGs（2日目）

2日目は、午前中に眉山登頂、その後プロの阿波踊りを見学し、午後は2コースに分かれて動物園とウミガメの博物館を見学した。1学期の授業では、品川にある水族館のマクセルアクアパーク品川を訪れており、2学期には上野動物園も訪れている。マクセルアクアパーク品川を訪れた際には、生徒から、「イルカショーの水の循環に無駄はないか」「ペンギンの展示スペースはその数に比して十分な広さがあるといえるか」「展示スペースが高い場所にあるため小さい子どもは見られないのではないか」「土産物店でのプラスチック袋を廃止すべきではないか」といったSDGs的課題が発見されていた。上野動物園では、「各動物の展示スペースは適切に確保されているか」「バックヤード展示は動物のストレス緩和の面において適切といえるのか」「出産を終えた動物を来園者の目にさらされる場所に展示することは適切か」といった課題が発見されていた。こうした事前学習を経て、生徒はとくしま動物園、日和佐ウミガメ博物館カレッタを見学した。

日和佐ウミガメ博物館カレッタは、動物園・水族館の4つの役割「種の保存」「教育・環境教育」「調査・研究」「レクリエーション」を担う施設であった。中でも、教育施設としての工夫が随所に感じられた（写真9）。展示スペースを子どもも大人も見られるように覗き穴を上下に設置したり、ウミガメの卵の殻に実際に触れたり、その重さを体感できたりする工夫があった。また、ウミガメの上陸数が近年激減しているグラフは、子どもの目線の方が見やすくなっていた。さらには、クマノミやウミガメに触れ合える場所もあった。

とくしま動物園もまた、上述した4つの役割を担う施設だった。この動物園は、アンデスコンドルの自然ふ化の成功数において日本一であり、園内にはアンデスコンドルについてより深く知ってもらうための工夫が随所にあった。各動物の説明が書かれたパネル展示は二段展示法になっており、幼児が徒歩で見られる位置にも説明文が掲示されていた。また、遊園地が隣接していることから、遊園地前後の来園者も見込めそうだった。



【写真9】「教育・環境教育」を意識した展示について考える

これまで授業では、人々の関心が動物園の「レクリエーション」的側面ばかりに寄せられることを問題視し、「種の保存」「教育・環境教育」「調査・研究」の3点を、来園者がより認知できるような動物園のあり方を考えてきたが、今回とくしま動物園を訪れて、来園者数を維持するためには「レクリエーション」の側面もまた欠かせないと考え直した。見学後には、SDGsの観点からとくしま動物園のさらなる来園者増に向けた工夫や方法について話し合った。

3、上勝町で考えるSDGs（3日目）

【午前 株式会社いろどり社長 横石知二さん講演、ガイドウォーク】

3日目は、午前中に（株）いろどりの社長である横石知二さんにご講演頂いた。県外の高校生に向けた講演を横石さんが引き受けてくださることは稀であり、尽力くださった一般社団法人ソシオデザイン理事の大西正泰さんには感謝申し上げたい。

上勝町を「葉っぱビジネス」で再生した横石さんの講演では、これまで上勝町が様々な困難に直面してきたこと、またその結果、「葉っぱビジネス」という独創的なビジネスが誕生したことが改めてわかった。1968年の豪雪や1981年の大寒波の折、雪害により主要産業だったミカンの木は大打撃を受け、林業を中心に発展してきた町に欠かせない杉の幼木も大きな被害を受けた。1979年に上勝町農協に就職した横石さんによると、当時の上勝町では、経済的な事情から住民は次々に町外へ出て行ったようだ。その中で、賛同もほとんど得られぬ中、料理の高級感を演出する妻物で地域活性化を目論んだ横石さんのビジネスは、今や妻物市場シェア全国80%というビッグビジネスに成長した。高齢者がLINEを使って受発注システムを使いこなす姿も話題となり、現在では高齢化・過疎化を救うビジネスモデルとして脚光を浴びている。



【写真10】講演後に、横石さんに質問に行く生徒。

横石さんのご講演からは、失敗しても立ち上がるレジリエンスの必要性和、人間関係構築力の重要性というメッセージが届けられた。講演後の休憩時間には、横石さんに直接質問に行った生徒もいた（写真10）。こういう積極性と主体性は、実際に人に触れ、感化されて育まれるものである。生徒がチャンスをつかもうと、自ら名刺を頂きに行ったことは嬉しいことだった。以下、講演を聴いた後の生徒の感想である。

〔生徒感想〕横石さんの「誰しものが主人公、誰もが輝ける場所がある」というような言葉がとても心に残りました。こんなふうに考えられることがとても素敵だと思いましたし、それを街全体でシェアできるまでには相当の覚悟と努力があったんだろうなどと考えると胸が熱くなります。皆が考えて自分に出来ることを探せる街。こんなに理想のコミュニティはどこにもないと思いま

す。また、私たちがずっとプロジェクトで言っていた再生可能な服の素材をやっと見つけることが出来て、しかもそれが沢山余ってしまっている杉から作られていると聞いてとても感動しました。(そもそも杉が余っているなんて知らなかったですが。) 街役場に反対され続けたこと、それでも努力し続けたこと、そのお陰でたくさんの住民が横石さんを必要とするようになったこと。全てが感動でしかなかったです。感想を伝えるに行ったら「また何かあったら」と名刺を貰えて、本当に嬉しかったです。

〔生徒感想〕何か始める時や、会社を作るという時、1番難しいことは人がやっていないことを見つけることだと思っていたけれど、見つけたことを売り出すまでの過程が難しいのだと知った。もし自分が同じように葉っぱを売り出そうと思いついても、最初にどこからも相手にされないようだったら、需要がないんだなと思い諦めてしまおうとも思った。自信を持って何かに取り組み、工夫を重ねてやり続ければ、誰からもできないだろうと思われることも、成果につながるのだと学ぶことができた。

講演後は、3コースに分かれてガイドウォークを行った。月の宿周辺を散策し、月ヶ谷温泉が木質チップボイラーを使って湯を沸かしていることを知った。さらには、いま目の前で採ったワサビの葉を試食する機会もあった。試食した生徒の感想は、「まるやかなやさしい味」。「食べる」ことで、わさびの味は、涙が出るような辛さだけではないことを生徒は発見した(写真11)。以下、ガイドウォーク後の生徒の感想である。

〔生徒感想〕ガイドウォークでは、徳島県上勝町でのみ採れる葉や植物の種類や名称だけではなく、どういった食材に使われるのか、どうお金になるかまで教えていただきました。葉の特徴としては、形が本当に綺麗なものがたくさんあり、芸術的でもありました。そのため、食材の飾り付けとして非常に有効であることを身に染みて実感しました。上勝町は年間降水量が多いと聞いていましたが、植物はよく育っており、形も崩れていなかったことに驚きました。上勝町の地形を利用していることも素晴らしいと思いました。



〔写真11〕手でちぎったばかりのワサビの葉を試食する。

【午後 コース別探究活動】

午後は、「まちづくりコース」「農業コース」「起業家コース」の3コースに分かれて、上勝町のゼロ・ウェイストを役場で支えた方や東京から移住して無農薬農業を実現した方、さらには月ヶ谷温泉で長年社長を務められた方、上勝町で働きながら子育てをする方、阿波晩茶を作る農家の方、移住コーディネーターの方、カナダから移住し教育観光プログラムを創って起業した方、起業家教育に携わる方等々、上勝町のSDGsを担う人々計8名に会いに行った。

「まちづくりコース」では、初めに、上勝町役場企画環境課でまちづくりの中核を担い、役場では参事を務めてきた桑原定夫さんの家を訪れて、ホテル WHY が完成するまでの経緯を教えて頂いた（写真12）。そこでは、たくさんのお話し合いの時間が必要だったことを知った。「1円の積み重ねが重要や」という桑原さんの言葉からは、じっくりと話しあうことの必要性が伝えられた。最後に、軒先に干してあった干し柿とみかんを頂いた。生徒の感想は「干し柿はじめて見た！」「みかん、すごい甘い！」だった。

次に、上勝町役場企画環境課に勤め、移住コーディネーターをしている安田知春さんのお話を伺った。安田さん自身は福井県出身で、2018年に観光会社の仕事で上勝町に移住した。移住者の視点から、町の魅力をどのように伝えているのか、どんな働き方がしくて現在の仕事についたかなど、聞かせてくださった。最後は、三重県出身で現在子育てをしながら RISE & WIN Brewing Co. BBQ & General Store の店長を務める池添亜紀さんのお話を伺った（写真13）。夕方はとても寒かったので、亜紀さんが用意してくださったホットレモンドリンクが身に染みた。その場にいた生徒は誰もが「このホットレモン、すごく美味しい」と驚くばかりだった。

私たちが日々食べているものとの違いは何なのか、改めて考える契機となった。「会う」「触れる」「食べる」という経験ができたことは、まさに現地研修の醍醐味である。以下、生徒の感想である。

〔生徒感想〕 景観を守るために自分の敷地内のことにも口出しされるのは大変ではないのかなと思ったけれど、地域間のつながりが濃くて、地域のことを自分ごとに行っている人が多いから出来ることだと思った。ホテル WHY の方や RISE&WIN の方など若い町外の方が上勝に魅力を感じて移住してきているということを聞いて驚いた。日本全国景色が綺麗で空気が美味しい田舎はたくさんあるけれど、それ以上の魅力があるのだとわかった。しかし、町外の人や行政が上勝の発展のため、環境問題改善のために行っていることは、元から住んでいる方には受け入れがたく、反対されることもあるということを知り、進める側とついていく側の意識の違いを感じた。町外から上勝にくる若い方は海外の色々なところに留学したり交流したりしてから来ている方が多いと聞いて、海外では日本よりもっと環境問題が身近なのかなと思った。今回お話を聞かせて頂いた方々はみんなキラキラ上勝のことについて話していて、自分の住む地域に誇りが持てることはとてもいいことだなと思った。



〔写真12〕 山の上にある桑原定夫さん宅へ伺い、お話を聴く。



〔写真13〕 気さくな池添亜紀さん。自然と話が弾む。

〔生徒感想〕 上勝町についてたくさん知ることが出来た。東京では体験できないことや聞くことができないことがたくさんあって、とてもいい経験になった。特に、RISE & WIN のあきさんの話は、息子さんの話などもあって自分たちに近いものを感じたので印象に残る体験になった。たくさんの人に優しくしてもらったり話をしてもらったりして、また行きたいと思える日であった。〔生徒感想〕 直接お話を聞くことが出来て楽しかった。RISE & WIN の方が引っ越してくる時に移住コーディネーターの方と保育園や小学校などを見学しに行き、そこで生活への安心感を抱いて移住したという話を聞いて、RISE & WIN の方のお話と移住コーディネーターの方の、お客様の希望に添うことを意識しているというお話がリンクしていて興味深かった。また、移住希望の方から、上勝町の良いところだけを推しすぎないというお話を聞いて、移住者の数にこだわらず、その方の今後まで考えているのはすごいと思った。

「農業コース」を選択した生徒は、3コースの中で最も試飲試食回数が多かった。初めに、一般社団法人ソシオデザインの理事で、吉備国際大学の講師も務める大西正泰さんに話を伺った。大西さんからは、起業時の戦略などを、具体例を用いてわかりやすく教えて頂いた（写真14）。次に、narumi farm の阿部なるみさんを訪ねた。阿部さんは大阪府出身で大手外資系ゼネコンで貿易・秘書・翻訳などの海外プロジェクトに携わった後、高知で有機農業を学んで2015年12月に上勝町で就農した。有機堆肥を使った有機農業に取り組む narumi farm を創業した方だ。有機農業を始めようと思ったきっかけや、やりがい、苦労話に至るまで、生き生きと楽しそうに自身の経験を語る阿部さんの話に、みな真剣に耳を傾けていた。生徒は、有機栽培ハーブティと有機栽培トマトを試食した（写真15）。さらに、自然に生えているニッキ（シナモン）の葉っぱを食べるなど、貴重な経験をした。

最後に、阿波晩茶・彩（いろどり）農家 Kamikatsu-Teamate 代表の百野大地さんを訪れた。百野さんもまた上勝町に移住された方である。百野さんは、日本に4つしか残存していない乳酸菌発酵茶の一つである「阿波晩茶」のPRや商品開発を行っている。移住前、前年度に摘まれたお茶の葉が多く廃棄されていることに心を痛めた百野さんは、生産者からお茶の葉を買取り、販売するビジネスを始めた。「生産者が違えばお茶の味も違う」。この言葉通り、生産者の方々の特徴を捉え、それをブランディングし、販売につなげたことで、生産者と消費者を結ぶ懸け橋となった。最後に生徒は、1日目に佐原先生が紹介



〔写真14〕大西さんから起業についての講義を受ける。



〔写真15〕摘んだばかりのハーブにお湯を注いで飲む。

された「成層圏阿波晩茶」を試飲した。感想は「阿波晩茶よりまろやかでおいしい」（写真16）。以下、生徒の感想である。

〔生徒感想〕 午後は主に農業のことを学んだのですが、まず有機農業についてのお話を聞かせてもらった阿部なるみさんからは、新しいことにも強気で挑戦していくことの大切さを学びました。実際に阿部さんは、大手外資系企業から上勝町での有機農業に切り替えて、今成功を収めているので、阿部さんの言葉にはとても説得力がありました。

また、阿波晩茶についての話をしてくださった百野さんからは、晩茶や彩農家を使って高齢化、過疎化の進む上勝町を救ってやろうという

気合い、生きがい、やる気が感じられました。また、そのやる気は勢いだけの無謀な挑戦ではありませんでした。何をどう直せばその目的に近づくのかを分析、実行していくことの大切さを改めて学ばせて頂きました。午後の経験は農業を将来やろうと思っているわけではなかったとしても、ためになる話ばかりでした。

〔生徒感想〕 大西さんの仕事の背景を色々聞き、起業することの大変さや、今は起業する人に貸し出す家があり、起業しやすい環境になってきていることを知った。私は起業家になりたいと思ったことはなかったけれど、今回のお話を聞いて少し興味を持った。トマト農家では、東京でOLをしていたが「いろどり」を知って、自分もやってみたいとのことで、上勝町に移住してトマト農家を始めたという話を聞き、すごいなと思った。また、トマトがとても美味しく驚いた。水や栽培方法がいいのだろうなと思った。ハーブもしっかりと味がして美味しかった。ハーブティは、体にいい感じがした。晩茶は成層圏のものとそうでないものを比較しながら飲むことができてよかった。思っていたよりも味が違い、成層圏のほうがまろやかで飲みやすかった。晩茶とその農家の人をしっかりと紹介しながら販売しているという話を聞くことができてとてもよかった。たくさんの農家さんの晩茶があったから全て飲んでみたいと思った。午後はいろいろなお話を聞くことができてとても勉強になったし楽しかった。

〔起業家コース〕では、初めに、月ヶ谷温泉の元社長で、現在は阿波晩茶・彩（いろどり）農家をされている美馬実さんを訪ねた。実際に「いろどり」の葉っぱビジネスを行っている作業場を見学しながら、繁忙期の様子や販売している葉っぱの種類について教えて頂いた（写真17）。葉っぱビジネスといっても、自然に自生しているものだけでは成り立たないため、植物の管理に手間がかかることも学んだ。次に、大西正泰さんから、起業時の戦略に関する話を伺った。起業



〔写真16〕 成層圏阿波晩茶を試飲する。



〔写真17〕 美馬さんから、葉っぱビジネスについて教えていただく。

するにあたり必要なもの、会社を維持していく上で必要な人手、売り上げに対する考え方など、起業にまつわる具体的な内容を講義して頂いた。最後に INOW Project Co-funder の Kana Lauren Chan さんと座談会を行った（写真18）。Kana さんはカナダ出身で、2013年に上勝町に移住した。カナダや日本、デンマークなど複数の大学でSDGsと観光を学んだあと、コンサルタントとして活躍している



〔写真18〕Kana さんとの座談会。

方だ。海外メディアはなぜ上勝町に注目するのか、海外向けに上勝という町をどうアピールしているかなど、実際に行っている具体的な内容を含めて、お話しくださった。以下、生徒の感想である。

〔生徒感想〕大西さんの話は、3日目の中で1番興味深いと感じました。話の内容を一言でまとめると、"起業・事業の戦略"です。起業をするとなった時、どこでどのような事業を始めるかを考えなくてはなりません。また、どうやったらより多くの利益を生むことができるかが非常に興味深かったです。利益は単価や希少性、回転率などによって異なることを、話を聞いて実感しました。例としては、100万円の利益が出る自動車を月1台売ると、1,000円の利益が出る商品を月100個売るとでは月に90万円も利益が異なり、年間で言うと1,080万円も利益に差が生まれます。とても単純なことですが、普段我々は、消費者の立場でそういったことをあまり考えないため、経営者としての立場を考える非常に良い機会となりました。他にも、イオンはお客さんを商品に集中させるために窓を1個も作っていないということだったり、ラーメン屋でジャズを流すと回転率が良くなることだったり、様々な企業の戦略が垣間見えて非常に興味深く、勉強になりました。最後に、カナさんの講演について、彼女の挑戦心とSDGsへの意識の高さに感動しました。彼女はカナダで生まれ育ち、数年仕事をした後に、徳島県上勝町に移住し、INO（イノウ）というプロジェクトの開始に尽力しました。彼女は母親が日本人とはいえ、カナダで育ち、ずっと英語を使ってきたため、日本語があまり流暢ではありません。しかし、そういった状況の中で、日本に移住しただけではなくプロジェクトの開始に尽力することは、非常に挑戦的で勇気が要ることだと、僕もとても理解できます（帰国子女で海外経験があるため）。そのため、すごく尊敬しました。

〔生徒感想〕上勝町で新しい事業を作るとなったとき、どんな事業を立ち上げるかと聞かれたとき、金銭面を重視してしまい、事業の厳しさを感じましたが、講演を聞いてみると、起業をしてみたいと強く思うようになりました。大西さんは年間で5つも事業を立ち上げていると聞いて驚きました。わたしも将来、社会のためにできる事業を立ち上げてみたいです。

〔生徒感想〕実際に葉っぱビジネスの商品を作っているお宅の夫婦の方の話を聞いて、奥さんがもうそれを生きがいの思っていて、横石さんの力が凄いなどと思った。大西さんの話を聞いて、

起業の難しさで大変さをより知ることができた。Kanaさんの話が個人的に1番響いて、進路とか考えることは沢山あるけど、やってみたくと思ったことにリスクとかを考えすぎずに飛び込んでみないと始まらないという言葉がすごい説得力があった。実際に海外から1人で上勝町にきて、大変なこととかも沢山あったと思うけど、すごくキラキラしていて、私もやりたいと自分で思ったことに積極的に取り組んでいきたいなと思った。

3日目の夕食時に、月の宿に宿泊していた生徒が、「部屋で捨てるゴミも、誰かが45分別しているんだよね」と言った。生徒は、ゴミを捨てたあとのことを考えるようになったようだ。宿にあるコカ・コーラの自販機で紙コップのコーヒーを買った生徒は、「部屋で紙コップを洗って、回収ボックスに捨ててに行った」と言う。いつの間にか、生徒の中ではゴミへの意識が高まっていた。月の宿では、宿泊客のゴミはどんな風に捨てられ、誰が45分別しているのだろうかとの疑問も湧き、支配人のご好意で、月の宿のバックヤードを見せて頂いた（写真19-1、19-2）。

驚いたのは、バックヤードにゴミの臭いが全くなかったことだ。コカ・コーラは専用の回収ボックスを置いていることや、バックヤードではゴミを10数種類に分別し、あとはゴミステーションでさらに分別していることも知った。一番困るゴミはどんなゴミか聞いたところ、煙草の吸殻が入った空き缶だった。分別が困難で臭いがひどいそれを、いま親切に案内してくださっている月の宿で働くスタッフの方の誰かが分別していると想像し、生徒は「私はちゃんと分別する」「ここで抹茶オレを買うけど、コップは洗って回収ボックスに捨てて来ます」と言った。ゴミが分別されなかったり、大量に捨てられたりする原因の一つは、それを分別したり処理したりしてくれている人の顔が見えないことだろう。プラスチックゴミも古着も国外に輸出して捨てる国が、過剰生産と大量廃棄を続けている。ふと後方を見ると、きれいに洗ったビニール袋が洗濯バサミで吊るされていた（写真19-3）。これは、研究旅行中に何度も見聞きした「上勝あるある」だ。上勝町では、使い捨てビニール袋を洗って干すのが普通なのである。



〔写真19-1〕バックヤードで分別し、ゼロ・ウェイストセンターでさらに分別する。



〔写真19-2〕ペットボトルは洗って完全に乾燥させてからリサイクルする。



〔写真19-3〕「上勝あるある」と呼ばれる光景。上勝町では、ビニール袋は洗って乾かしてからリサイクルする。

4、最終日に考える SDGs（4日目）

4日目の朝、ホテル WHY 宿泊組は自身が出したゴミの45分別体験をした。ホテルが用意してくれる朝ごはんにはみかんがついているが、その皮やお茶の葉やコーヒー粉は生ごみとして捨てなければならない。生ごみは、通常のゴミ資源をリサイクルする場所から少し離れた場所にあるコンポストに入れた（写真20）。コンポストをはじめて見る生徒も多かった。



〔写真20〕コンポストに生ごみを捨てる。

上勝町を出て、午前中に鳴門市へ移動し、大鳴門橋架橋記念館エディで渦潮の仕組みを学んだあと、うずしお汽船に乗って渦潮を見た。その後、帰途についた。

おわりに

2021年度の高校2年生は、コロナ禍であったために、高1年次に実施するオリエンテーション旅行や部活動での合宿も経験できなかった学年である。今回の研究旅行は、彼らにとって初めて学校の仲間と過ごす旅行となった。以下、生徒の感想である。

〔生徒感想〕 SDGsのことをしっかり学びつつ、今まで全然興味もなかった徳島を知れてとても楽しかった。ここでしか得られない体験を沢山できたのでここで終わりではなく東京に戻ってからも今回のことを何かしらに繋げていきたい。

〔生徒感想〕 上勝町の方々はみんな本当に親切で歓迎してくれている感じがして嬉しかった。月の宿も WHY もすごく良い宿泊所で充実していた。また、東京では見られない星空が見れて感動した。

〔生徒感想〕 全体を通して楽しい旅行になった。たくさんの人に優しくしてもらっていい旅行になった。また、ホテル WHY でのゴミの分別やくるくるショップなど初めて知ったものも多く勉強になった。正直少し大変だと思ったけどゴミの削減に大きく貢献する事業だと思うのでいつか全国に広がってほしいと思った。

〔生徒感想〕 今回、上勝に行って、町民の方々が全員知り合いなことに驚きました。どこに行っても小さいコミュニティだからこそのいい雰囲気が出ていました。RISE&WIN のアキさんの移住したての頃のお話を聞いて、心がほっこりしました。町民の方全員が優しくて輪で繋がっていて、アットホームな感じが上勝町のいいところの一つなんだろうなと思いました。また、45分別を体験して、その大変さを知りました。朝のゴミ出して、少しでも油分がついていたり、濡れていたりすると、廃プラで回収されてしまい、1キロあたりの値段も書いてあったので、余計にもっと丁寧に洗わなきゃいけないんだと反省させられました。この取り組みを日常生活で取り入れている上勝町民に感動するとともに、もっと私もゴミのリサイクルに対する意識を

変えていかないといけないと感じました。

〔生徒感想〕 今回の旅行はとても思い出に残るものとなった。それは楽しかったというのがあるが、聞いたお話が全て興味深いものばかりであったからだ。正直徳島なんてと思っていたし、上勝町ってどこだよ、45 分めんどうくさいって思っていたけど、全て意見が 180°変わった。これからは先入観だけでなく経験したことを知識、考えとして自分のものにしていきたいと思った。

〔生徒感想〕 全体を通してとても楽しかった。徳島空港に着いたときに、大きく SDGs を掲げた垂れ幕のようなものがあり、意識が高いと思った。上勝町で話を聞いて回ったときに、話してくださる方全員が SDGs や環境問題、地域が行なっていることについて詳しい知識を持って話していて、世界で取り上げられている大きな問題を自分ごととして解決するよう行動していることがすごいと思った。ホテル WHY では、ゴミを 45 分別にすることが頭にあって 1 日過ごしたことで、食べたらずぐ仕分けするなど、行動が少し変わったと思う。上勝町で、ゴミのリサイクル率が 8 割を達成した事実だけを聞くと、凄いなあと感じたが、実際の上勝の人は残りの 2 割を削減する努力をしていて、自分のゴミの捨て方について改めて考えさせられた。ただ、人が少ないからこそ出来ることでもあると感じた所があるので、田舎ではない東京や都市の地域での取り組み方に上勝町での取り組みがどのような影響を与えるのか気になった。夜みんなで見た星がとても綺麗で、元気がもらえたとし、ここに住んでいる人は毎日こういう景色を見られるんだと思うと羨ましくなった。3 日目の朝山付近を歩いた時は空気が澄んでいて、すっきり目が覚めてとても気持ちよかった。観光地としてメジャーではない本当の田舎らしさを初めて味わった気がして、凄く楽しかったし、暖かい人がたくさんいた。

〔生徒感想〕 はじめに、高校に入ってから研究旅行や修学旅行に行くことは初めてだったため、非常に楽しくて幸せでした。集団行動は苦手であまり好きではありませんが、友達との仲が深まったことは言うまでもありません。それだけでも、来て良かったと思います。しかし、来て良かった理由はそれだけではなく、徳島県上勝町の大自然を実感できたことや様々な人々のお話を聞くことができた点にもあります。徳島県の大自然は素晴らしく、木々は生い茂って、夜には満天の星空で星をたくさん見ることが出来ました。あれだけたくさん星を見ることができたのは、数年ぶり、もしくは人生で初めてかもしれません。本当に言葉で表せないくらい感動しました。また、横石さんや大西さんなど本当にすごい方のお話を聞くことができて良かったです。上勝町についてたくさん学ぶことができ、勉強になったことも数え切れないほどあります。本当に先生方、お話をしてくださった方、ホテルの方々ありがとうございました！

〔生徒感想〕 最初はオーストラリアでホームステイがしたかったからこの教養総合のコースを選んだのになんで徳島？って感じだったけど、実際に来てみると旅館の方とかご飯食べるところの方とか色んなお話をしてくれた方々とか関わってくださった徳島県の方々がみんないい人で凄く

いいところだなと感じた。東京ではそこまで綺麗に見えない星も見れて、普段しないような体験を自然の中で沢山できて楽しかった。WHYではゴミの分別をして、プラスチックゴミでも洗って乾かしたものと汚れているものでは回収に45円も変わったり、普段適当に捨てているゴミを東京の人たちが1番考えなければいけないんじゃないかなという気持ちになった。

〔生徒感想〕徳島の人達全員が優しくフレンドリーで心が温まりました。上勝町はゼロ・ウェイストのために一人一人が尽力していてすごいなと実際に行って改めて感じました。老後に移住するなら徳島がいいなと思います。楽しかったです！

〔生徒感想〕最初は、徳島に何をしに行くのか？と聞いていましたが、人の良さや自然、環境への考えなどたくさんのことを学ぶことができました。私の住んでいるマンションにも分別が多くあり、いつもこんなに分別する必要なんてあるのかと思っていましたが、上勝町の話聞いて積極的に分別をしたいと思います。

〔生徒感想〕徳島を実際に観光をしてとても楽しめました。ホテル WHY の分別の大変さには驚きましたが、徹底的な分別をすることにやりがいを感じられました。今回の旅行は有意義に過ごせたと思います。

〔生徒感想〕3泊4日して、上勝町を感じる事が出来た。ゴミ分別は、プラは洗って出すと出さないのでは10倍も処分するのに費用がかかってしまうということが知れた。とても衝撃的だったので、家族にも教えてあげたい。徳島のしいたけはすごく美味しくて、感動した。早く家族にも食べてもらいたい。うずしお汽船の行きはジェットコースターみたいで楽しくかった。うずしおも間近で見れて、吸い込まれそうで凄かった。徳島ラーメンは美味しかった。また食べたい。

〔生徒感想〕最初は上勝町のことはなにも知りませんでしたがこの旅行を通じてSDGsのみならず町おこしの面でもとても最先端を走っている町なのだとわかりとても貴重な体験をすることができたと感じました。既存の考えにはない新しいことを取り入れているところも学べるが多かったので、講演などで学んだポイントをきちんと忘れずに将来に生かしていきたいです。

〔生徒感想〕最初は少しだるいと思っていたが、どの講演も面白くて上勝のような街で自然を生かした仕事はこれからの高齢化社会で必要なものと思った。お茶自体も色々な種類があり、大気圏にあげて旨味の強いお茶を作ったり、全く思いもしない作り方なのがおもしろかった。

〔生徒感想〕みんなとの仲が深まってよかった。また、上勝町のハイテク技術と高齢者の方々の連携が思ったよりすごくて驚いた。

〔生徒感想〕本当はオーストラリアに行くはずだったのが、徳島に変更になってしまったけどとても楽しかった。阿波踊りや渦潮を見ることができ、貴重なお話をたくさん聞くことができ、いい経験になったと思う。ホテル WHY は45種類のゴミの分別を体験することができて面白かった。また、今まで話したことがなかった人とたくさん話せて、仲が深まった感じが嬉

しかった。全体を通して楽しかったし、様々なことを体験できてよかった。

〔生徒感想〕上勝町の人たちの人柄の良さを感じました。WHYのスタッフの方々や、大串さん、大西さん、美馬さんなどとお話していると上勝町の魅力がどんどんと伝わってきて、住人の方々がどれだけ上勝町を愛しているのかを感じることができました。初めはオーストラリアに行けないことがとても残念だったけれど、たくさんのことを学び、自然に触れることができる上勝町に行くことができて本当に良かったと思います。

〔生徒感想〕オーストラリアに行くことが厳しいという現状に置かれ、とても辛かったのですが、普段だったら行く機会のない徳島に行くのはとても貴重な機会になったし、もう終わってしまった今考えるととても楽しかったなとも思います。このような研究旅行を急遽ご時世に合わせて提供してくださって本当にありがとうございました。阿波晩茶は本当にものすごく気に入ったので家で大切に家族と飲もうと思います。

⁽¹⁾ 上勝町ゼロ・ウェイストセンターに勤める大塚桃菜さんの講演より。

⁽²⁾ RISE & WIN Brewing Co. BBQ & General Storeの店長を務める池添亜紀さんのお話より。